

「してもらいたいこと」

～ほんとうにってもらいたいこと～ルカ6:20～38 IIコリ5:15～17

私たちは1週間どのような言葉を発してきたでしょうか。周りの人の徳を高める言葉だったでしょうか。それとも相手を責める言葉が多かったでしょうか。私たちは言葉を発する前にどのような言葉を発するのか考えています。自分の心が良ければ、良い言葉が出て、心が悪いと悪い言葉が出てしまう可能性があります。それは私たちに委ねられている部分です。

■ ほんとうにってもらいたいこと

聖書には黄金律とよばれている大切な教えがあります。その内容は『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』ということです。この2つの教えをさして「律法全体と預言者が、この二つの戒めにかかっている」と表現されています。ここで律法全体と預言者は旧約聖書全体を意味していました。イエスキリストは旧約聖書をこのような端的な言葉で表現しました。今日読みました聖書箇所は山上の垂訓とよばれている箇所であり、これも凝縮してみると黄金律で表現することができる箇所になります。ルカ6章31節「自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい。」とあります。では私たちはこの自分にしてもらいたいことを知っているのでしょうか。私たちは急に腹痛を覚えた時、どのようなことをしてもらいましょうか。ある人は休めるように布団をひいてほしい、ある人は病院に連れて行ってほしい・・・と違った願いがあります。しかし根本は腹痛が治ることが本当の願いではないでしょうか。このようにいろいろな願いはありますが、本当の願いを分かっていることが多いのではないのでしょうか。黄金律の2つ目である「隣人を自分と同じように愛する」とは自分を愛していない人は隣人を愛することができないという意味になります。自分の本当の願いが分かっている人は相手の願いも理解することができます。ですから本当にしてもらいたいことを理解しなければなりません。

■ ①されたくない事?

私たちは育ってくる中で自分に「してもらいたくないことは周りの人にしない」という考えが大半ではなかったのかと思います。自分にとって「○○してもらいたくない」ということは被害者であることを示しています。○○されると私は嫌だ、困るということです。それは自分中心です。聖書ではこのような表現をしていません。私たちがしてもらいたいことを周りにしていくということです。私たちは周りの人を驚かしたり、いたずらしたり、時に人を傷つけることをしてしまいます。また、陰口、悪口など人に見えないところでしています。私たちは本当にそんなことがしたいのでしょうか。「ロマ7:15 私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。」とあるように自分のしたいことが分からないと何もすることができません。人は育った時代によって人は変わるのでしょうか。これは当時のギリシャ人が書き残したものです。…「だって昔に比べて人間のサイズが縮み、明らかに人間の質が低下しているからだ!」「父は子と、子は父と心が通わず、客は主人と、友は友とおろあわず、兄弟同士も昔のように親密な仲にはならない。親が年をとれば、子はこれを冷遇し、罵詈雑言を放ってそしるようになる。年老いた両親に、育ててくれた恩義に報いることもしない。そして強い者こそが正しいと考えるやからによって、互いの国をおかしあう日が来るだろう。力が正義となり、『恥』という美徳は失われる。……そうなれば人間には、悲惨な苦悩のみが残り、災難を防ぐ術もなくなるだろう」これを読むと分かるように、古代ギリシャ人にとっての「破滅の日」とは、自然災害だとか、技術の進歩だとかによってもたらされる

ものではありませんでした。それは人間の心から「モラルが崩壊する日」のことだったのです。…とあります。これは何を意味しているのでしょうか。愛がなくなることすなわち自己中心になることを表現しています。だからこそ、私たちにはイエスキリストの生き方を模範としなければならないのです。イエスキリストの生き方は自己中心ではありませんでした。どのような時も自らの役割に徹していました。生まれた場所から十字架上で死に復活するまでです。イエスキリストは自分にされたくないから行動していたのではありませんでした。私たちが自己中心からくる、「されたくないこと」から行動することなく、愛を中心として行動していきましょう。

■ ②あなたの心と願いを整える

また私たちが目先のことで判断していたのでは正しい願いを持つことはできません。それは私たちの見えている範囲というものはとても小さいものだからです。そして私たちの見る見方は自らが生きてきた中で経験した知識だけで判断していたのであれば、偏った見方になってしまいます。聖書では「人間的な標準」で人を見ることはしません。とパウロは語っています。この人間的な標準とは私たちにとって常識、普通とよんでいるものですが、これこそ、人によって千差万別です。同じ人は一人もいません。私たちがどのようにするべきでしょうか。「IIコリント5:16ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。5:17 だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」とあるように、私たちはキリストによって新しく造られた者となり続けることが必要なのです。すなわち古い価値観、私たちの常識を見つめ直し、聖書が伝えている価値観に直していくのです。教会とは自分を見つめ直す場所です。周りの人を裁くためではなく、自分の行動を振り返り、悔い改めていくところなのです。そうしている中で自分の人生における目的、役割が理解できて、心と願いを整えることができるのです。

■ ③与える人生

それに気づけると私たちは与える人生になっていくことができます。私たちは受けたことに気づけたから、与えることができるようになってきます。私たちが本当の愛を知った時に、十字架における犠牲に気づけた時に、私たちが周りの人を愛し、与えることができるようになっていきます。聖書における「自分を愛するように隣人を愛する」を実践するためには自分が高価で尊く、愛される存在であることを受け入れる必要があります。そして与える人生へと変化させていきましょう。

最後に

イエスキリストが歩まれた時代は旧約聖書の律法を守ることが大切なことでした。イエスキリストはその律法を愛で示されました。言葉では黄金律でまとめ、行いでは犠牲となりました。律法学者、パリサイ人たちは律法を守れない人を見下し、優越性、卓越性を誇示していました。しかしイエスキリストの歩みはそのような人間的なものを破壊し、そして愛と犠牲によって全人類の救いとなりました。目先にしか目が向いていないと真理を悟ることができません。私たちがどのような歩みをするべきでしょうか。本当にしてもらいたいことを理解し、それを隣人にしていくことがどれほど大事なのかを理解し歩んでいきたいと思えます。神を愛し、隣人を自分のように愛する歩みをしていきましょう。

(要約者:平澤 一浩)

(8月21日)